

【学会見聞録】

日本生理学会第 100 回記念大会（京都）に参加して

佐藤 亜希子

国立長寿医療研究センター
東北大学加齢医学研究所

2023年3月14日から16日、国立京都国際会館で開催された日本生理学会第100回記念大会に参加しました。なお、当学会との共催シンポジウム“加齢に伴う生体機能低下と抗老化への多角的アプローチ”は、大会二日目午後からスタートしました。

私は、今大会初めて生理学会に参加してみて、大会運営に関わる先生と学会会員の100回記念大会への熱の入った取り組みを感じることができました。受付では大会記念グッズ（生理学会のロゴマークのカエルがプリントしてあるエコバッグとクリアケース）が配布されました。また、初日に当研究部の研究生である丸山葉穂さんがポスター発表をすることになっていたためポスター会場に向かうと、会場のすぐ側には多くの企業ブースが展開されていました。そして大会二日目夕方には、100周年祝賀鑑開きのセレモニーがあり、ロゴマークが焼印してある升に入ったお酒も振る舞われました。

初日夕方に開催されたノーベル賞受賞者による対談については、大会開催前から大きな話題になっていたため、私も拝聴することを楽しみにしていました。スバンデ・ペーボ博士（2022年ノーベル医学生理学賞受賞）と山中伸弥博士（2012年ノーベル医学生理学賞受賞）による対談“生命科学の未来と人類の未来”では、両博士から若者への熱いメッセージがありました。以下、健忘録を残したいと思います：i) 苦勞しても、本当に自分が興味のあること（好きなこと）を見つけることは大切（ペーボ博士）。誰しも好きなことには普段以上の力で取り組むことができるし、頑張ることができるからなのだそうです。ii) 基礎科学を学ぶべき（ペーボ博士）。あらゆる現象の根幹となる学問だからなのかと理解しました。iii) バイオインフォマティクスを学ぶ機会をつくることも有

効（ペーボ博士）。確かに、おかげで我々は生命現象をより深く探ることができるようになりましたし、昨今の研究には欠くことのできないツールとなっています。iv) 多くの経験をしてください（山中博士）。何度も耳にしたことがあります。ステイブ・ジョブスも点と点をつなげる大切さを説いていました。v) 英語は大切（山中博士）。特に英会話のことをおっしゃっておいりました。英語を母国語としない人は誰しも苦勞するものと改めて思いました。（なお、大会初日と二日目には両博士の基調講演もありましたが、ここでは割愛します）。

大会二日目の共催シンポジウムは、活発な質疑応答が繰り広げられた大変有意義なセッションとなりました。柿澤昌先生（京都大学）と内田さえ先生（東京都健康長寿医療センター）が座長のもと、町田修一先生（順天堂大学）、佐藤綾美先生（東京都健康長寿医療センター）、筆者、内田先生、柿澤先生（発表順）らが発表を行いました。後方の立ち見まで会場は満席であったことから、老化研究への大きな関心が伺えました。興味深かったことは、アカデミアや企業の研究者だけではなく、医療現場で働く先生も会場に集まり熱心に質問されていたことです。同日夕方、柿澤先生と内田先生のご厚意により開催された懇親会では、先生方が老化研究と基礎老化学会へ真摯に取り組んでおられ、発展していくことを心から望んでいらっしゃることを窺い知ることができました。私もまた、超高齢社会となった日本から老化研究がより多く世界に発信されるようになるといいな、と思っています。最後に、今回、このような素晴らしい機会を与えていただきました柿澤先生と内田先生に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



（写真）懇親会にて集合写真。左から柿澤先生、著者、佐藤（綾）先生、内田先生、町田先生。